

## 「荒川河川整備計画（骨子）」に対する意見

①氏名	嶋津暉之		
②住所	(都道府県名) 埼玉県	(市区町村名) 三郷市	
③電話番号又はメールアドレス	048-958-2309 tshimazu@sa2.so-net.ne.jp		
④年代	20歳未満・20代・30代・40代・50代・ <u>60歳以上</u>	⑤性別	<u>男性</u> ・女性
意見該当箇所	⑥ 意見その3		
頁	行		
9	14～18	<p>骨子</p> <p>「3. 河川の整備の実施に関する事項</p> <p>3.1.3 河川環境の整備と保全に関する事項</p> <p>(2) 自然環境の保全と再生</p> <p>」</p> <p><b>意見</b></p> <p>一級水系・円山川水系河川整備計画に倣って、荒川においても自然に優しい、自然の回復を目指した河川整備計画を策定すべきであり、荒川の間接点にあって川の生態系を完全に分断している玉淀ダムの撤去も盛り込むべきである。</p> <p>(1) 円山川水系河川整備計画のように荒川も自然の回復を前面に打ち出すべきである。</p> <p>最近策定された国の河川整備計画で、自然の回復を目指す、模範とすべき河川整備計画がある。近畿地方整備局が策定した円山川水系（兵庫県）の河川整備計画である。円山川水系の円山川下流域・周辺水田は2012年7月にルーマニアで開催されたラムサール条約第11回締約国会議（COP11）でラムサール条約登録地に指定された。それを受けて、円山川水系は自然に優しい、自然の回復を目指した河川整備計画が2013年3月に策定された。</p> <p>その基本的な視点は次のとおりである。</p> <p>① 川の営力による自然の復元力を活かしつつ、河川環境の整備を行い、過去に損なわれた湿地や環境遷移帯等の良好な河川環境の保全・再生を図る。</p> <p>② 水域から山裾までの河床形状をなだらかにして、山から河川の連続性を保全する。</p> <p>③ 本川と支川・水路との間の落差を解消し、生物の移動可能範囲の拡大を図る。</p> <p>上記②と③の具体的な内容は次ページに示すとおりである。</p> <p>荒川においても円山川水系に倣って、自然の回復を前面に打ち出した河川整備計画を策定すべきである。</p>	

「荒川河川整備計画（骨子）」に対する意見

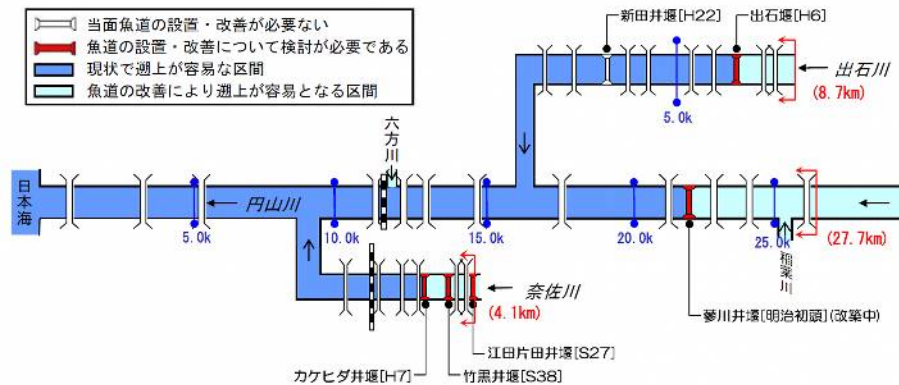
円山川水系河川整備計画（近畿地方整備局 2013年3月策定）より

4.3.3 水生生物の生態を考慮した河川の連続性確保に関する事項

1) 上下流の連続性の改善

整備箇所は許可工作物であるため、施設の改築等にあわせて魚道の設置・改善に努めるよう施設管理者に指導するとともに、改善にあたって必要な連携を図る。なお、蓼川井堰は現在改築にあわせ魚道の改善を実施している。

目的	整備箇所
既設魚道の改善	カケヒダ井堰、竹黒井堰、江田片田井堰、蓼川井堰、出石堰



2) 合流部の落差解消（流域との連続性の改善）

施設管理者や地域と協働して本川と支川・水路との間の落差を解消し、生物の移動可能範囲の拡大を図る。

国管理施設については、可能な限り簡易的な方法で落差を解消するものとし、許可工作物については、施設の改築等にあわせて魚道の設置・改善に努めるよう施設管理者に指導するとともに、改善にあたって必要な連携を図る。

目的	整備箇所
樋門と河川の落差解消	向鶴岡川落差工、奈佐川第3樋門、寺内第一樋門、上之郷樋門

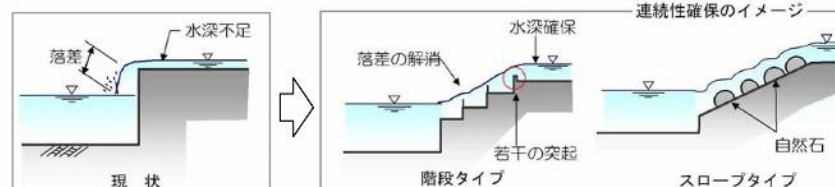


図 4.3.9 連続性確保のイメージ

**(2) 荒川の間接点にあって川の生態系を完全に分断している玉淀ダムの撤去を河川整備計画に盛り込むべきである。**

玉淀ダムは荒川の中流、大里郡寄居町に1964年に建設されたダムで、発電と農業用水の供給を目的としている。総貯水容量350万 $\text{m}^3$ 、堤高32m、堤頂長110m、堤体積3.7万 $\text{m}^3$ の重力式コンクリートダムである。埼玉県企業局が建設したが、2008年に東京電力グループの東京発電㈱へ売却された。発電能力は4,300kW、農業用水は最大約5.4 $\text{m}^3$ /秒で、櫛引台地の荒川中部土地改良区の農地に供給されている。

玉淀ダムは荒川の間接点にあって川の生態系を完全に分断しているため、撤去を求める声が強い。2008年、玉淀ダム撤去促進期成同盟会が結成され、玉淀ダムを撤去し、本来の自然な川の復活を求める運動が進められている。発電量はさほど大きくないので、玉淀ダムの上流に堰を建設して、農業用水の取水口を移せば、玉淀ダムの撤去は可能だと考えられている。

日本では熊本県の荒瀬ダムが本格的なダム撤去の唯一の例である。荒瀬ダムは県営の発電ダムであった。撤去工事は2012年9月にスタートし、2017年度まで6年かけて行われてきている。今年3月21日には川の流れをみお筋に切り替える作業が終わった。ダムで分断されていた球磨川の自然な流れが約60年ぶりにつながった。まだ撤去工事中にあるが、球磨川下流部の自然は大きく甦りつつある。

玉淀ダムの発電水利権は2022年3月末であるので、その時に荒瀬ダムのように水利権を更新することなく、ダム撤去が行われるように荒川河川整備計画に玉淀ダムの撤去を盛り込むべきである。

